

日本語の活用

高 橋 太 郎 *

はじめのはじめに - 論を展開するまえに、前提として

「国文法の活用」は、一般文法論の『活用(conjugation)』ではない。

日本語の文法論は、日本語と中国語のちがいの認識からはじまった。

島国である日本では、はなしことばではなく、主として中国の文章をよむことによって中国文化を吸収した。その際、表語文字である漢字でかかれた文章を日本語流に読む「漢文」という文章形態をつくりだしたが、その漢文は、中国語の文章に、返り点と送り仮名をかきそえたものである。返り点は語順のちがいをしめたものであるが、送り仮名がしめすものは、中国語にはない、日本語の単語の語尾と接辞であったので、そのことから、これらを単語ととらえる「助詞」「助動詞」というものが「国文法」の認識のなかに存在しはじめ、動詞からこれらをとりのぞいたものだけが、「国文法の動詞」としてのこったのである。

日本の学生に「〈よむ〉と〈よんだ〉はどちらがうか」とたずねると、ただちに「現在形と過去形です」と答える。そして、それは〈英文法〉でならったのだという。「では、国文法では？」とたずねると、たいてい「わすれました」と答える。「〈よん〉が動詞で、〈だ〉が助動詞だ」とおしえてやっても、助動詞「た」はともかく、「よん」が動詞の連用形だというと、キツネにつままれたようなカオをする。

「よまない」「よまれる」の「ヨマ」、「よんだ」の「ヨン」、「よめば」の「ヨメ」(命令形はない)など、日本語の法則にあわない動詞の切りかたは、「国文法」のなかにしか存在しないのである。

この論文では、「国文法の活用」を採用しない。

第0章 用言的な活用と動詞的な活用

動詞的あるいは用言的な語形変化を「活用」(conjugation)という。

-なお、語形変化には、「活用」のほか、体言的な語形変化である「曲用」(declension)や、日本語にみられる「とりたて」、ヨーロッパ語にみられる「比較級変化」のようなものもある。

日本語の活用には、動詞、形容詞、名詞述語に共通する「用言的な活用」と、動詞に特有な「動詞的な活用」とがある。

-用言的な活用と動詞的な活用は、それぞれ用言的なカテゴリによる活用と、動詞的なカテゴリによる活用である。このことは、宮島達夫1972『動詞の意味用法の記述的研究』(国立国語研究所報告43)のなかでいっただされ

* 関西国語大学 教授 日本語学

たものである。

「用言」とは、日本語において動詞と形容詞をあわせたものをさす用語であるが、これは、日本語では、形容詞も活用するからである。形容詞が活用するのは、日本語に特有な現象であるが、これは、〈形容詞〉+ 〈コンピュータ〉という、もともと2単語のくみあわせであったものが複合して、形容詞の語形となったからである。そして、さらに言いわすれてはならないのは、名詞を述語にするためにつかわれるコンピュータ「(デ)ある」やコンピュータ的な接辞「だ」「です」も、その活用は、用言的である。

形容詞の活用が動詞の活用とことなるのは、コンピュータの活用が動詞の活用とことなるのとおなじである。このようにみるならば、「用言的なカテゴリー」は、「コンピュータ的なカテゴリー」といいかえてもよいのであり、その観点からみれば、活用のしかたが2種類にわけられるというのは、日本語に特有なことではなく、世界中の言語に共通であるといったほうがよいだろう。

なお、ここまで橋本進吉のいいたした「形容動詞」にふれてこなかったが、いわゆる「形容動詞」は形容詞の一部であるので、そのことをのべておく。品詞は、①語彙的な意味、②文中でのはたらき、③語形のつくりかたの、3側面からみた、単語の分類であるが、「形容動詞」は、どの側面からみても、「形容詞」とかわらない。たとえば、①「うつくしい」「きれいな」「きたない」のように、あるいは、「白い」「まっ白な」「あかい」「まっかな」のように、類義語と対義語をふくむ意味グループは両者をまぜないとなりたないし、②ともに、連体修飾語になることが第一のはたらきであるし、③「形容詞」と「形容動詞」の活用表は、おなじワクグミをもっていて、両者のちがいは、動詞の五段活用とサ変活用とのちがいと同様、ワクグミのなかにはいる形のちがいにすぎない。だから、この論文では、両者をそれぞれ「イ活用」、「ナ活用」とよび、そのちがいは、おなじ形容詞のなかの活用のちがいであるととらえる。

第1章 述語になる単語の活用 – 用言的な活用

日本語の用言は、述語になることとむすびついて、活用する。

用言の活用のしかたは、このあとの(3)の、よっつの活用表のとおりである。なぜこのように活用するのは、つぎの(1)と(2)の段階にわけて説明するのがわかりやすいであろう。

- (1) 文は、単語をくみあわせてくみだてられることによって、その内容が場面から独立することが可能になる。
- (2) 文は、述語になった単語がムードとテンスのカテゴリーにおいて語形を確定されることによって、その内容が現実と関係づけられる。
- (3) したがって、用言は、そのムードとテンスによって活用する

(1) 文は、単語をくみあわせてくみだてられることによって、その内容が場面から独立することを可能にする。

(1-1) 二語文では、現実からモノ、運動、性質などの側面をひっぱりだして単語であらわし、その単語をくみあわせて文にしてあらわす。つまり、ひとつのまとまりである現実のデキゴトやアリサマを分析と総合の過程をとおしてあらわすのである。

イヌがはしる。

モノの側面：イヌ

運動の側面：ハシル

ボールはまるい。

モノの側面：ボール

性質の側面：マルイ

※できごと、ありさまなど(現実)……文であらわす。

※モノ、運動、性質、ようすなど(現実の断片) ……単語であらわす。

(1-2) 文と単語というふたつの単位が分化しているおかげで、わたしたちはいろんな現実をあらわしわけることができる。つまり、文と単語の分化をとおして、言語は有限の単語によって無限にちかひ、さまざまな現実をあらわしわけることができるのである。もし、このことがなかったら、さまざまな現実のデキゴトやアリサマのかずだけ、記号が必要になるはずである。

	はしる	とぶ	なく	…
いぬ				
きる				
きじ				
：				

$2 + 2 = 4, 10 + 10 = 20, 100 + 100 = 200, \text{ etc}$

$2 \times 2 = 4, 10 \times 10 = 100, 100 \times 100 = 10000, \text{ etc}$

(1-3) 文は、単語をくみあわせてくみだてられることによって、場面からの独立が可能になる。一語だけの文では、めのまえにないできごとやありさまをのべることができないが、二単語の文になると、それが可能になる。

- ・バス! [めのまえだけ]
- ・きた! [めのまえだけ]
- ・バスが きた。
- ・バスが くる。 [めのまえから独立]

このことによって、言語は、過去のことでも未来のことでも、また、確かなことでも不確かなことでも、あらわすことができるようになった。

- ・おおかみが きた! [現実から独立]

そればかりでなく、現実にはおこっていない、「おおかみがきた」というようなウソもいえるようになった。

(2) 文は、述語になった単語がムードとテンスのカテゴリーにおいて語形を確定されることによって、その内容が現実と関係づけられる。

ここであげた、二語文(2単語でできた文)は、「さしだし」(なにについてのべるかをさしだす部分)と「のべ」(「さしだし」の部分にさしだされたものについてのべる部分)とからなりたっている。この「さしだし」の部分と「のべ」の部分は、それぞれ「主語」、「述語」といわれる。

言語は、二語文になることによって、現実に存在するデキゴトやアリスアを、現場からぬきだして、コトガラそのものとしてのべることが可能になったのであるが、コミュニケーションのなかで伝達の道具として文がつかわれるためには、そのコトガラが、いつのことなのか? ほんとうのことなのか? などなどがわかるように、そのコトガラが現実と関係づけられることが、あらためて必要になる。

(2-1) 二語文が2単語でできているという2単語性の側面(単語がヒトツでなくて、フタツであるということ)は、コトガラそのものを現場からきりはなして独立させることを可能にした。けれども、そのコトガラをふたたび現実と関係づけるしごとは2単語性の側面だけでは手にあまるのである。では、その役めをひきうけるものはナニか。ここにおいて、この二語文の述語がとる用言的な活用が登場してくるのである。

(2-2) つぎの(ア)と(イ)の各対において、それぞれ、(ア)述語の発話時との前後関係、(イ)事実の確認のしかたにおいて、述語が対立させられている。

- (ア) もじき バスが くる。 - きつき バスが きた。
- (イ) バスが くる。 - バスが くるだろう。

(2-3) 二語文の代表である、動詞述語文は、聞き手に対するのべかけかたによって、(ア)のべたて、(イ)きそいかけ(ウ)めいれいの文にわかれる。

- (ア) はやく ねた。 (イ) はやく ねよう。 (ウ) はやく ねろ。

述語がこのようなムード形式をとるのは、ふつうは動詞だけである。(ただし、「よい親であろうとする」「美しかれといのる」のような例もあるので、これも用言的なカテゴリーのなかに入れておいてもよいかもかもしれない。)

(2-4) このようにして、文の基本が2単語でできていることと、述語が活用することによって、文の基本構造がつくりだされているのである。

(3) 用言の基本的な活用表 (ここでは、終止形だけ)

(3-1) 日本語の用言的な活用は、聞き手へのべかけかた(のべかけ、さそいかけ、めいれい)のムードをもっているが、これを完全にもっているのは動詞だけなので、ここでは、いちおう、これを動詞的なカテゴリーのほうへまわしておく。

(3-2) のべかけかたのうち、のべたてのムードは、確認のしかた(断定と推量)のムード、およびテンス(非過去と過去)のカテゴリーをもっている。

(3-3) 日本語の活用語は、うえにあげたようなムードやテンスによる諸種の活用形式をとる以前に、ていねいさとみとめかたによって、ふつう? みとめ、ふつう? うちけし、ていねい? みとめ、ていねい? うちけしという、より一般的な、よっつの活用形式にわかれる。

[用言の基本的な活用表]

動詞の基本的な活用表 (ただし、「用言的なカテゴリー」だけ)

K C I

ていねいさ みとめかた		ふつう体の形式(ふつう体の動詞)		ていねい体の形式(ていねい体の動詞)		
		みとめ形式 (みとめ動詞)	うけし形式 (うけし動詞)	みとめ形式 (みとめ動詞)	うけし形式 (うけし動詞)	
ムード	テンス					
のべ たて 形	断定形	非過去形	よむ	よまない	よみます	よみません
		過去形	よんだ	よまなかった	よみました	よみませんでした
	推量形	非過去形	よむだろう	よまないだろう	よむでしょう	よまないでしょう
		過去形	よんだだろう	よまなかっただろう	よんだでしょう	よまなかったでしょう

イ活用形容詞の基本的な活用表

ていねいさ みとめかた		ふつう体の形式(ふつう体の形容詞)		ていねい体の形式(ていねい体の形容詞)	
		みとめ形式 (みとめ形容詞)	うけし形式 (うけし形容詞)	みとめ形式 (みとめ形容詞)	うけし形式 (うけし形容詞)
ムード	テンス				
断定形	非過去形	たかい	たかくない	たかいです	たかくありません
	過去形	たかかった	たかくなかった	たかかったです	たかくありませんでした
推量形	非過去形	たかいだろう	たかくないだろう	たかいでしょう	たかくないでしょう
	過去形	たかかっただろう	たかくなかっただろう	たかかったでしょう	たかくなかったでしょう

ナ活用形容詞の基本的な活用表

ていねいさ みとめかた		ふつう体の形式(ふつう体の形容詞)		ていねい体の形式(ていねい体の形容詞)	
		みとめ形式 (みとめ形容詞)	うけし形式 (うけし形容詞)	みとめ形式 (みとめ形容詞)	うけし形式 (うけし形容詞)
ムード	テンス				
断定形	非過去形	すぎだ	すぎじゃない	すぎです	すぎじゃありません
	過去形	すぎだった	すぎじゃなかった	すぎでした	すぎじゃありませんでした
推量形	非過去形	すぎだろう	すぎじゃないだろう	すぎでしょう	すぎじゃないでしょう
	過去形	すぎだっただろう	すぎじゃなかっただろう	すぎだったでしょう	すぎじゃなかったでしょう

述語名詞の基本的な活用表

ていねいさ みとめかた		ふつう体の形式(ふつう体の述語名詞)		ていねい体の形式(ていねい体の述語名詞)	
		みとめ形式 (みとめ述語名詞)	うけし形式 (うけし述語名詞)	みとめ形式 (みとめ述語名詞)	うけし形式 (うけし述語名詞)
ムード	テンス				
断定形	非過去形	いぬだ	いぬじゃない	いぬです	いぬじゃありません
	過去形	いぬだった	いぬじゃなかった	いぬでした	いぬじゃありませんでした
推量形	非過去形	いぬだろう	いぬじゃないだろう	いぬでしょう	いぬじゃないでしょう
	過去形	いぬだっただろう	いぬじゃなかっただろう	いぬだったでしょう	いぬじゃなかったでしょう

(4) 用言の基本的な活用表 (いろいろな機能をふくむ)

日本語の活用形は、つぎのように、文中での機能によって、その語形をかえる。

終止形 連体形 中止形 条件形 譲歩形

ここでは、説明をくわえるための紙数の余裕がないので、表だけかかげる。それも、動詞だけあげる。①形容詞や名詞のばあい、終止形は、さそいかけ形と命令形のないふんだけワクがすくない。②ふつう体、みとめ形の活用形容詞・述語名詞の連体形以下の語形は、それぞれこのあとの[]内のとおりである。③動詞の諸カテゴリーの活用表は、「第3章まとめ」の表から考えてほしい。

[タカイ・タカカッタ、タカク・タカクテ・タカカッタリ、タカケレバ・タカイナラ・タカイト、タカクテモ・タカクタッテ]
 [イヌデアル・イヌダッタ、イヌデ・イヌダッタリ、イヌナラバ・イヌナラ・イヌダッタラ・イヌダト、イヌデモ・イヌダッテ、]

動詞の基本的な活用表

機能	ムード	ていねいさ みとめかた		ふつう体の形式(ふつう体の動詞)		ていねい体の形式(ていねい体の動詞)	
		テンス		みとめ形式 (みとめ動詞)	うけし形式 (うけし動詞)	みとめ形式 (みとめ動詞)	うけし形式 (うけし動詞)
終止形	のべた て形	断定形 推量形	非過去形	よむ	よまない	よみます	よみません
			過去形	よんだ	よまなかった	よみました	よみませんでした
終止形	さそいかけ形 命令形		非過去形	よむだろう	よまないだろう	よむでしょう	よみませんでした
			過去形	よんだ(だ)ろう	よまなかった(だ)ろう	よんだでしょう	よまなかったでしょう
連体形			非過去形	よもう	(よむまい)	よみましよう	よまなかったでしょう
			過去形	よめ	よむな	よみなさい	(よみますまい)
中止形	第1 なかどめ 第2 なかどめ ならべたて形		非過去形	よみ	よま(に)	よみまして	よみません(して)
			過去形	よんで	よまないで (よまなくて)	(よみましたり)	(よみませんでしたり)
条件形	(バ - 条件形) (ナラ - 条件形) (タラ - 条件形) (ト - 条件形)		非過去形	よめば	よまなければ	(よみますれば)	よみませんでしたら
			過去形	よむなら よんだら	よまないなら よまなかったら	(よみますなら)	よみませんと
譲歩形	(テモ - 譲歩形) (タッテ - 譲歩形)		非過去形	よむと	よまないと	よみしたら	(よみませんでしたも)
			過去形	よんでも よんだって	よまなくても よまなかったって	よみますと よみしても	

第2章 動詞は、運動をあらわすこととむすびについて、活用する。

(0) この章でとりあげる動詞

さきに第1章の「(4)用言の基本的な活用表」のひとつとして「動詞の基本的な活用表」をおいた。このなかに、他の用言にはない「さそいかけ形」と「命令形」があった。この2語形は、動詞が運動をあらわすことによって生まれた語形であって、他の品詞が述語になっても、かならずしも一般に生ずる、用言に共通の語形ではない。(しかし、述語になることは重要なことなので、そして、ときに、「うつくしかれ」とか「つねに普通人であれ」とかといわれることもあるので

、用言的な活用のなかに入れてもよいとおもっている。)この章でとりあげるのは、「第3章 まとめ」の「いろいろなカテゴリーの動詞」のなかにあるような、それ自身がひとつの活用表をもつような動詞に属するものである。

たとえば、ヴォイスのカテゴリーのなかには、能動形「よむ」、受動形「よまれる」、使役形「よませる」…などの基本語形があり、その、ひとつひとつが、基本的な活用表をもつ。そのことは、つぎのような事実をしめせば、わかるだろう。

動詞の基本的な活用表の語形列のいちばんうえには、「よむ」「よまない」「よみます」「よみません」の4語形がならんでいる。基本語形「よまれる」をこの4語形のところにあてはめると、「よまれる」「よまれない」「よまれます」「よまれません」の4語形がならぶことになる。ここまですめれば、基本語形「よまれる」が動詞の基本的な活用表を、じぶんのぶんとして、まるごとひとつもっていることがわかるだろう。この「よまれる」によって実現される基本的な活用は、ヴォイスのカテゴリーに属する「よませる」、「よませられる」などの基本語形によっても、ひとつひとつ実現される。

いまヴォイスの基本語形についてのべたことは、他のカテゴリーに属する基本語形についても、いえることである。

動詞は、運動をあらわすこととむすびついて、活用する。ここでは、動詞がどんなカテゴリーをもつか、そして、そこからどんな基本語形が生じたかということだけのべて、そのそれぞれの基本語形がどんな活用表をもつかということについては、いちいちのべない。それは、いままでのべたことによつて、わかるとおもうからである。そういう動詞をとりあげるのである。

(1) 運動をあらわすこととアスペクト

(1-1) アスペクト

デキゴトは時間軸上の一定の位置で成立するものである。このことは、デキゴトをあらわす文(ア)を、モノの特徴をあらわす文(イ)、(ウ)とくらべるとよくわかる。

(ア) くじらが およぐ。

(イ) くじらは おおきい。 (ウ) くじらは ほ乳動物で ある。

モノの特徴をあらわす文は、時間軸上の特定位置と関係がない。時間軸上に局在するのはデキゴトである。ただし、デキゴトは、運動だけではない。状態もデキゴトとして時間軸上の一定の位置で成立する。つぎの(エ)と(オ)は、ともに時間軸上に局在するデキゴトをあらわしているが、(エ)があらわすのは運動であり、(オ)があらわすのは状態である。

(エ) ゆうべは ナガレボシが ながれた。

(オ) ゆうべは 月が まるかった。

モノの運動は動的なデキゴトであり、モノの状態は静的なデキゴトであるが、どちらもデキゴトであつて、時間軸上に局在する。そして、テンスは、こういう事実のうえに成立するのである。

けれども、運動と状態は、時間との関係が同じではない。動的であるというのは、時間ともに運動しているということである。「月がまるかった。」という文のあらわす状態は1まいの写真におさめることができるけれども、「ながればしがながれた」という文のあらわす運動は、映画でないと、きちんとあらわすことができない。1まいの写真におさめると、ほしがとまってしまうからである。

運動は時間とともにすすむ。それは、ある時間位置では止まって、ある時間位置でおわる。そして、その止まりからおわりまでのあいだ運動がつづく。つまり、運動は、始発の局面、終了の局面と、そのあいだ持続する運動の局面からなりたつ。そして、このような、運動の局面構成とかかわつて、動詞は、完成相(ハシル・ハシッタ)と継続相(ハシッテイル・ハシッテイタ)とが対立することになる。

このような語形の対立は形容詞にはない。形容詞は運動をあらわしていないからである。完成相というのは、動詞のし

めす運動を、はじめからおわりまで、まるごとのすがたでとらえてあらわすいいかたであり、継続相というのは、動詞のしめす運動を、持続過程をなす局面のなかにあるすがたでとらえてあらわすいいかたである。

- ・さっき わたしが 運動場に いる とき、 こどもたちが トラックを はしった。
- ・さっき わたしが 運動場に いる とき、 こどもたちが トラックを は して いた。

前者は、わたしが運動場にいるあいだに、はしりはじめて、はしりおわったのであり、後者は、わたしが運動場へいくまえに、こどもたちがはしりはじめており、わたしが運動場をさるときも、まだはしりおわっていなかったのである。これを映画にたとえると、つぎのようにいえるだろう。ひとつのウゴキをはじめからしまいまで全部映画にとって、それをぜんぶうつすのが完成相であり、はじめとおわりをカットして、途中の一部だけをうつすのが継続相である。

運動をハジメからオワリまで、まるごとのスガタでとらえるのを、「完全相」(perfective)といい、途中の持続中のスガタでとらえるのを、「不完全相」(imperfective)という。そして、このように、運動を、スガタの対立からとらえるのを「アスペクト」(aspect)という。日本語の完成相と継続相の対立は、この〈「完全相」対「不完全相」〉という、アスペクトの対立の典型のひとつである。(英語の「進行相」や「習慣相」も「不完全相」である。)

(1-2) 局面動詞

動詞のしめす運動の局面(phase, Aktionsart)をあらわすためには、「シハジメル」「シツツケル」「シオワル」のような局面動詞がある。これらの局面動詞は、動詞のしめす運動の局面とかかわる点でスル・シテイルのようなアスペクト動詞と共通である。しかし、後者が運動の局面を(そとから)まるごととらえてあらわすか、局面のなかにわりこんで、(なかから)とらえるかという、運動が局面とかかわるすがたのあらわしかたの対立であるのに対して、前者は、どの局面をなりたせる動作であるかという、局面そのものの指定のしかたの対立である点で、ことなる。

(2) 運動への参加者、格支配、ヴォイス、など

(2-1) 格支配

モノをあらわす名詞と運動をあらわす動詞をくみあわせると、デキゴトをあらわす文ができる。なぜそれができるかというと、モノの運動ができごとだからである。ただし、そのデキゴトをモノと運動にわけることができるのは人間の言語のおかげであることは、すでにのべたとおりである。

「こどもが はしる。」という文があらわす内容としてのデキゴトは、コドモというモノが参加している。このばあいのデキゴトへの参加者は、コドモだけである。けれども、参加者はいつもひとつとはかぎらない。「太郎が 次郎を なぐる。」という文のあらわすデキゴトがなりたつためには、動作の主体(シテ)と動作の対象(ウケテ)のふたつの参加者が必要である。また、「花子が ものほろおに タオルを かけた。」では、参加者は、花子、ものほろお、タオルのみつになる。このように、デキゴトの種類によって参加者のかずがことなる。

デキゴトにどんな参加者がくわわるかということは、動詞のしめす運動によってきまる。

〈コドモガ ハシル〉というデキゴトの参加者がひとつであるのは、その運動がハシルという運動だからである。同様に、「なぐる」「かける」という動詞のあらわす運動が、その参加者のかずを2なり3なりにきめているのである。

これは、かずだけのことではない。おなじふたつの参加者を必要とする運動であっても、その参加者の参加のしかたがおなじだとはかぎらない。「花子が タオルを たたむ。」「子どもが おもちゃを こわす。」にみられるように、「たたむ」「こわす」のような、モノに変化をあたえるような動作(もようがえの動作)は、動作主体と変化のウケテを要求するし、「大工が いえを たてる。」「花子が セーターを あむ。」の「たてる」「あむ」のような、つくりだす動作のばあいには、動作主体と生産物が参加者になる。

このように、運動の性格がデキゴトへの参加者をきめるのである。

こうしてデキゴトに参加することになったそれぞれの参加者は運動に対して一定の関係をもっているのだが、これを言語化したばあい、その関係が参加者になるモノの性格によってわかるばあいもある。たとえば、〈メシ・タロウ・クウ〉で成立するデキゴトのばあいには、タロウがシテで、メシがウケテであることは、〈ヒトはメシをくうものだ〉という常識によってあきらかである。しかし、〈ハナシカケル〉という動作で、参加者が〈ハナコ〉と〈タロウ〉であるようなばあいには、どちらが主体でどちらがアイテであるかということは、言語的にしめきれないと、わからない。

参加者の運動に対する関係をあらわす手段はいくつおりの種類がありうるが、日本語では、名詞の格と語順とがふつうにもちいられ、そのうち名詞の格のほうが決定的である。語順としては、能動文ではシテをしめす名詞がウケテをしめす名詞よりまえにおかれるのがふつうであるが、語順のきまりは、中国語や英語のように決定ではない。

動詞が文のなかで(あるいは、連語のなかで)名詞の特定の格とくみあわさるとき、その動詞がその格を支配するという、格支配(case government)は、ふつうには、斜格(oblique case, 主格をのぞいた格)についていう。

「くう」という動詞は「めしをくう」のように対格を支配し、「のる」という動詞は(日本語では)「電車にのる」のように与格を支配する。また、「おしえる」という動詞は、「学生に文法をおしえる」のように、与格と対格を支配する。

(2-2) 他動詞と自動詞

動詞のなかには、他のものに力をおよぼす動作をあらわすものと、そうでないものがあり、それぞれ他動詞(transitive verb)、自動詞(intransitive verb)とよぶ。形式的にいうと、対象的な関係で名詞の対格を支配するものが他動詞であり、そのような支配をしないものが自動詞である。

他動詞

- ・ちいさななべで 牛乳を あたためる。
- ・おばさんは 両手を ひろげて、とんで いる かを パンと たたいた。
- ・ぼくのおじさんは 字の こまかい 本を よむ。
- ・先生は もっと きた おおきな 辞書を 机の 上に おいた。

自動詞

- ・おがわの みずが さらさら ながれる。
- ・ひろいのはらで しが なく。
- ・運動会の つなひきの ときに、ふとい つなが きれた。
- ・大阪へ いった ときは、おじの うちで ねる。

他動詞：ひっぱる たてる はこぶ だす なくる ける わたす
なげる みる にる……

自動詞：いく かえる あるく ころぶ とぶ およぐ すわる
ねる おきる つかれる ほえる ……

(2-3) ヴォイス

デキゴトをあらわす文は、もっともふつうには、動作主体を主語にし、動作対象を補語にしてみてるのだが、文脈の必要から、動作対象を主語にし、動作主体を補語にしてみてることもある。このような構造の対立の側面から文をみると、前者を能動構造の文、後者を受動構造(うけみ構造)の文という。

能動と受動のように、述語のしめす動作への、どの参加者を主語とし、どの参加者を補語にするかという、動作参加者(actant)と文メンバー(sentence member)の関係にかかわる文法的なカテゴリーをヴォイス(voice)という。

能動構文と受動構文の対立は、統語論的な対立であって、この側面において、ヴォイスは統語論的なカテゴリーである。けれども、それと同時に、日本語などの動詞は、能動構文の述語になるときと受動構文の述語になるときとで、そのかたちをかえる。したがって、日本語などにとっては、ヴォイスは刑能論的なカテゴリーでもある。

ヴォイスは、動作参加者と文メンバーの関係にかかわるカテゴリーであるが、この動作参加者を必要とすることが、動詞のあらわす運動によってきまるのだとすれば、ヴォイスもまた、動詞が運動をあらわすこととかわるカテゴリーだということができる。

能動態(active voice)と受動態(passive voice)の対立のしかたのタイプは、この他にも、まだいくつかのバリエーションがある。また、日本語の動詞がかかわる形態論的なカテゴリーとしてのヴォイスには、この他に、動作の指示者が主語になる使役態(causative voice)や、相互にはたらきかける、ふたつの動作主体が、ともに主語になったり、主語と補語にわかれたりする相互態(reciprocal voice)がある。

- ・ 光尚は じきに あおうと いて、権右衛門を 書院の 庭に まわらせた。
(森鷗外 「阿部一族」)
- ・ 鉄平と 相子、おたがいに 無視しあう。(山田信夫 「華麗なる一族」)
- ・ 竹内、黒板を 背にして 一同に むかいあう。(橋本忍)

(これらについてのくわしい説明は、この引用では省略する。)

デキゴトへの参加者との関係がかかわるカテゴリーとしては、ヴォイスの他に、やりもらいや敬讓がある。

(2-4) やりもらい

だれかへのサービス(「恩恵」ともいう)としてする行為をあらわすときは、やりもらい動詞を使う。「よんでやる」「よんでもらう」「よんでくれる」のようなやりもらい動詞は、ムード・人称的な側面とヴォイス的な側面をかねそなえている。

<本をよむ>という動作は、一人で読むときには、「太郎が本をよむ。」「花子が本をよむ。」のように、ただ「本をよむ」というのだが、これが、もし、だれかのために讀むのならば、その動作はつぎのようにいわれる。

- ・ 太郎が(私が) 次郎に 本を よんで やる。
これは、太郎のがわからのいいかたであるが、これを次郎のがわからのいいかたにすると、つぎようになる。
- ・ 太郎が 次郎に (私に) 本を よんで くれる。
また、このおなじ動作を、次郎のがわから、次郎を主語にしていうと、つぎようになる。

・次郎が（私が）太郎に 本を よんで もらう。

このように、だれかがだれかのためにする<よむ>という動作を、だれのがわから、だれを主語にしていかによって、3種類のいいかたができる。

だれかのためにする動作を、サービスのおくり手またはうけ手のがわから、そのどちらかを主語にして、いいあらわすいいかたを「やりもらい」という。やりもらいは、動詞の第二中止形と補助動詞「やる（あげる・さしあげる）」「くれる（くださる）」「もらう（いただく）」との組み合わせによってあらわされる。

サービスの、おくり手、うけ手と主語の関係についていうと、「してやる」と「してくれる」はサービスのおくり手が主語になり、「してもらう」はサービスのうけ手が主語になる。

また、サービスの方向についていうと、「してやる」は<いく>の方向であり、「してくれる」と「してもらう」は<くる>の方向である。

これを表にすると、つぎのようになる。

サービスノ	オクリテ、ウケテト ホウコウ	シュゴノ カケイ	主語が サービスのおくりて	主語が サービスのうけて
	「いく」の方向		して やる	
	「くる」の方向		して くれる	して もらう

(2-5) 敬讓 - 尊敬と謙讓

動詞は、文法的なてつづきによって、「よまれる(うけみと同形式)」「およみに なる」「およみなさる」のような形式で尊敬の動詞になる。

・ステーションへは、青木さんと 洗吉さんが おくって いかれた。

(鈴木三重吉「桑の実」)

・水俣病を研究してこられた細川さんが おなくなり になりました。

(土本典昭「水俣、患者さんとその世界」)

・坊ちゃんは、ねえやと ならんで おかけなさい ますでしょう。(桑の実)

尊敬の動詞は、動作主体を尊敬して、その動作をしめすときにつかうかたちである。

文法的な尊敬の動詞をつかうかわりに、語彙的に尊敬の意味をもつ 特別な動詞を使うことがある。「なさる」「いらっしゃる」「おっしゃる」「めしあがる」「めす」「くださる」などは、それぞれ「する」「いく・くる・いる」「いう」「たべる」「きる」「くれる」などの尊敬語である。動詞は、文法的なてつづきによって、「お…する」「お…申す」「お…申し上げる」「お…いたす」のような形式で謙讓の動詞になる。

・「いらっしゃいませ。(あたまをおおったてぬぐいとる)… お待ち しましたわ。」

(長谷部慶次ほか「忍ぶ川」)

・そのとき 私は あなたを おうらみ ました。

(倉田百三「出家とその弟子」)

・末筆ながら旅さきにて、貴女さまのご幸福をこころから おいのり もしあげます。

(山田洋次ほか「男はつらいよ、寅次郎恋歌」)

・たしかに おひきうけいたしますわ。(獅子文六「自由学校」)

謙譲の動詞は、動作のあいて(直接または間接の対象)を尊敬してふるまう動作であることをしめす形式である。現代語では、ほとんどのばあい、動作主体は、はなして(または、はなしてのがわのもの)である。

文法的な謙譲動詞をつかうかわりに、語彙的に謙譲の意味をもつ特別の動詞をつかうことが有る。「いたす」「もうす・もうしあげる」「おめにかかる」

「まいる・あがる」「いただく・頂戴する」「さしあげる」などは、それぞれ「する」「いう」「あう」「いく・くる」「もらう」「やる」などの謙譲語である。

語彙的に敬語的な意味をもつ尊敬語や謙譲語を使うのは、形態論的なレベルで文法的でないのであるが、統語論的なレベルでは、それぞれ尊敬構文、謙譲構文をなして、それらは、もちろん、文法的な敬語構文である。

動詞が尊敬と謙譲を分化させているのは、動詞が運動をあらわして、デキゴトへのいろんな参加者とくみあわさるからである。名詞も、接頭辞「お」あるいは「ご」をくっつけて、敬意をあらわす語形をもっているが、尊敬と謙譲の形態論的な分化はない。「おてがみをくたさる」と「おてがみをさしあげる」は、それぞれ、

尊敬と謙譲の意味をもっているが、形のうえの分化はない。また、「お正月」「おトイレ」「おあそび」のような、それぞれ一定の感情的意味をつけくわえるものも、おなじてつづきである。そうしたところに動詞と名詞の違いがあらわれている。

尊敬の動詞は、主格の名詞であらわすような動作主体に対するはなして(または、態度のもちぬし)の敬意とかかわるのであるが、運動をあらわさない「ある」が所有をあらわす場合には、写格名詞でしめされる所有主体に対するはなして(または、態度のもちぬし)の敬意とかかわる。

・デスク・プランとおっしゃると、大臣のむねのなかには、すでにいくとおりかの青写真が
おありになる。…そういうことですね。(華麗なる一族)

動作主体であるにしても、所有主体であるにしても、ともに主体である。そして、こういうときには、謙譲形式でなくて、尊敬形式がつかわれる。このように、主体と対象を区別とらえるところに動詞の、一つの、たいせつな特徴がある。

尊敬と謙譲の分化の基本は、デキゴトへの参加者と敬意の関係であり、このことが動詞の動詞らしさとかわっている。

動詞の尊敬と謙譲の形式は、デキゴトへの参加者とかわるので、登場人物の制限された文章の中では、文の主語や補語が省略されていても、動詞の敬譲形式によって、その動作が、ダレの、ダレに対する動作であるかがわかることがよくある。源氏物語のような、昔の物語をよむばあいには、これをてがかりにして内容をよみとくことが読解技術のひとつになっている。

(3) 意志動詞と使役、やりもらい、もくろみ

(3-1) 使役・やりもらい

使役の基本的な用法では、指示者から指示をうけた動作主体が動作を意志的におこ

なうのである。他動詞による能動態とことなるのは、この点である。次のふたつの文の「自分」のさしめすヒトがことなることが、このことをよく示している。(イ)の文では、主語になった「ははおや」は指示者にすぎないので、この「自分」は、動作者である補語の「こども」をさすのである。

(ア) ははおやは こどもを 6 時に 自分で 起こした。

(イ) ははおやは こどもを(/に) 6 時に 自分で おきさせた。

無意志動詞をむりに使役の基本的な用法でつかうと、演技をさせることになる。

(ウ) 監督は その ばめんで 役者を 牛の こえに おどろかせた。

やりもらいのばあいも、その基本的な用法は、だれかのためにする行為をあらわすのであるから、意志的にならざるをえない。

(3-2) もくろみ

もくろみ動詞は、なにかのためにする動作をあらわす形式である。もくろみ動詞も、基本的な用法には意志動詞がつかわれる。もくろみ動詞には、「して みる」「して みせる」「して おく」などがある。

「して みる」は、ためしにする動作をあらわす形式である。

・かれは 手を あげて みた。すぐ むこうでも 応じた。

(志賀直哉「暗夜行路」)

・彼女は あしを まげ、ひざを 湯の うえに だした 遠慮した かつこうをしていたが、ころみに そのあしを ゆるゆるとまゑに のばして みると、すっかり のばしきることが できた。(高見順「故旧忘得べき」)

・水ん なか よく みて みる。ずいぶん いるぜ。(石原慎太郎「太陽の季節」)

このなかには、どうなるかをためすもの(前2例)と、知覚や理解のための条件をつくるもの(後1例)とがある。また、「してみたい」「してみよう」のかたちで体験の希望や意志をあらわす用法もある。

・おれも こんな 女と 一生に 一度 恋愛して みたいものだ。

(「故旧忘得べき」)

・工場から ひっこぬいて、これを 自分の 手で 男に して みよう。

(徳田秋声「あらくれ」)

「してみせる」は、てほんやみせびらかしのためにする動作をあらわすが、また、ひとにほこりうるものとして動作を完成させることをあらわす用法がある。

・3人で この店を もりたてて みせるとりきんで いた 彼女が (あらくれ)

このような用法には、つよい意志があらわれている。

「しておく」は、アスペクト動詞としてもはたらくが、ここでは、もくろみ的な用法だけにしぼって、ふたつの用法をあげてお

く。

その一つは、積極的に体験することをあらわす用法である。

- ・ おれも 一度 その ひとに あって おこう。
- ・ なんでも みとかにや。
- ・ どのような もので あれ、一度は みて おく ほうが よい。

もう一つは、ことさらにする動作、しかたなくする動作をあらわす用法で、無意志動詞をむりに意志動詞化している点で、もくろみ動詞の面目躍如としている。

- ・ 新聞諸説の注文が こないのは、自分が あまりにも 純粹な 芸術家だからである、とでも おもって おく こと。
- ・ せいぜい なごりを おしんで おきましたよ。
- ・ この 試合は わざと まけて おいた。

第3章 まとめ

(1) 用言的カテゴリーと動詞的カテゴリー

	形態論的なカテゴリー	これをもたらす意味・機能
用言的 カテゴリー	ムード(いいきり・おしはかり) テンス ていねいさ みとめかた	述語になる モノの属性をあらわす…
動詞的 カテゴリー	ムード(のべたて・さそいかけ・命令) アスペクト・局面 他動性 ヴォイス 敬讓(尊敬と謙讓) やりもらい もくろみ(使役・やりもらい)	述語になる 意志的な動作をあらわす 過程のある運動をあらわす 主体と対象の参加する運動をあらわす 格を支配する 意志的な動作をあらわす

(2) いろいろなカテゴリーの動詞のつくりかた

つぎのような諸形式は、それぞれが、第1章(3)(4)でしめたような活用表を持っている。文法的な派生動詞は、接辞をくっつけてつくられたものであり、文法的な複合動詞は、単語になりうる要素をくっつけてつくられたものであり、文法的なくみあわせ動詞は、補助動詞などをくみあわせてつくられたものである。

てつぎ カテゴリー	もとの 動詞	文法的な 派生動詞	文法的な 複合動詞	文法的な くみあわせ動詞
ヴォイス動詞	よむ	よまれる よませる	よみあう	
アスペクト的な動詞	よむ			よんで いる よんで ある よんで いく よんで くる
局面動詞			よみはじめる よみつづける よみおわる	よんで しまう よもうと する
もくろみ動詞				よんで おく よんで みる よんで みせる
やりもらい動詞				よんで やる よんで もらう よんで くれる
可能動詞		よめる	よみうる	よむ ことが できる
敬讓動詞	よむ	よまれる	およみする およみなさる およみいたす およみもうしあげる	およみに なる
その他	仮定動詞			よむと する よんだと する
	例示動詞			よんだり する
				よむ ことが ある

【参考文献】

- (1) 宮島達夫 1972 『動詞の意味用法の記述的研究』、国立国語研究所報告 43
- (2) 高橋太郎他 1988-2001 (毎年改訂) 『日本語の文法』(未公版)

ク ス ー